

《さー……》
(雨振る音)

《ぱたぱたぱた》
(走り寄つて来る足音)

(縁側に腰掛け、雨が降る外を眺めている“あなた”。
強まる雨脚をぼんやりと見つめていると、足音が近付いてくるのに気付きそちらを向く)

ナコ 「おお、こ）におつたのか！ うむ、今戻つたのじや！

軽く外を見てきたのじやが、ちと……雨脚が強くなりそうじやつたのう。
帰り道を教えてやると言つておいて何じやが、こ）の雨で帰らせるのはその……のう！」

(ナコの様子に“あなた”は頷き、仕方が無いと返事をする)

ナコ 「んつ、そ……そ……うか？」

そう言つてくれるのであれば、ワシとしては安心出来るのじやが。
……すまぬのう、約束しておつたというのに、今日帰してやれそうになくて。
泊まつてくれるというのであれば……うむ！
今日も、お主の世話はちやんとさせて貰うからの！ うむ……うむつ！」

《……ひと》

(そつと近付き、“あなた”の横にナコが座る音)

(そろり、と。

ナコが”あなた”に近付き、ちやんと腰を下ろす。
視線は外の降り続ける雨へと向けられている

ナコ

「んつ……隣、座つても良いかの？」

……ふふ、有難うじや、

……まだ雨脚が強くなりそうじやのう」

ナコ

「普段ならば気にもしなかつたのじやが……」うしておると雨の音以外にも色々聞こえるものじや
な。

時折何処かの草むらががさりと揺れる音、木々に当たる雨粒が葉を弾く音。
雨の中にも色々な音が混ざつておるようじや……。

それに、何より……隣にいるお主の音が、よおく……聞こえるの」

《さら……》
(衣擦れの音)

ナコ

「ふふ♪

こうして肩を寄せておると、お主の服が擦れて鳴る音。

とくんとくんという、お主の血が巡つておる鼓動の音。

雨音に混ざつて消えそつになりながら、それでも……確かに感じられる音があるものなんじやなあ」

（“あなた”に体を預けながら、耳を揺らしながら聞こえる音に感じ入るように瞳を閉じるナコ）

ナコ
「ん♪ くうお……ん♪

くふ♪ ……当たり前の事なんじやが、妙にそれが嬉しいのう。

うむ……嬉しくて、ふふ♪

何故か……自然と頬が持ち上がりてしまうのじやよ。

お主を帰してやれずに、申し訳ない気持ちで仕方が無いはずなのに……何故か、胸が弾んでしまつておる。

……本当に、度し難い狐じやのう、ワシという奴は「

ナコ
「のお、お主……主様？

怖くは無い、かのお？

昨日、主様に情けを頂いてはしたない姿を……お主に綿る姿を見せておいて、今日はこの雨じや。ワシが、主様を帰さぬために、何か策を弄(ろう)しておるなどとは、思わぬ……かの？」

(じい、と。

”あなた”の様子を伺うように、声をかけてくるナコ。

昨日の様子を思い返しながらも、ゆっくりと首を横に振る”あなた”)

ナコ

「……思わぬのか？

……ワシが、ろくに力などもうないと言つたからかの？

むう……実は、嘘をついておるだけで、力を隠してお主を誑かそう(たぶらかそう)としておる悪しき妖狐(ようこ)なのかもしけれぬぞ？

……くやつ！？ ……まあ、確かに、そんな力があれば、昨夜にあんな醜態は見せぬじやろうけど！

……うー、主様はよう見ておるのう……まったく、見透かされておつて恥ずかしいのじや

ナコ
「くやん……。

ご名答じやよ、主様。この雨はワシとは無関係じや。

もしかしたらそうと思われて怖がられてはおらぬかと思ったが、余計な事だつたようじやの、ふんつ！

……まあ、怖がられておらぬのなら、ワシとしては嬉しい限りなのじやけれどな？ ……ふふ♪

ナコ
「ありがとうじや、主様。

本当はの？ ……ワシ自身がこの雨に、お主がまだ」(つづいてくれておるのを喜んでしまつたもの

じやから余計に……。

お主が、怖がつて……ワシから離れようとしてしまつたらどうしよう、などと……不安になつてしまつただけなんじや。

昨日のお主の優しさを知つておれば、そんな事ありえないと分かつておつたはずなのにのう。

……そんな些細なもしかしたらが、今のワシには奇妙なほど恐ろしくて堪らなくなつてしまつて……の」

《さらり……》

(より一層身を寄せ、肌を擦り合わせる音)

「主様……。

まだ……昼餉(ひるげ)まで時間もある。

勿論夕餉にも……眠るにも、じや。

どうせこの雨では外になども出れぬし……のう?

時間を持て余しておるようならば、どうじやろう。

……昨夜の続きを、ここに、というは……嫌じやろうか?」

「思わず手に入れたまだお主といられるこの時間を……ワシは無為に過ごしたくないのじや。主様さえ良ければ、時間の許す限り……雄と雌と重ね合わせ、液を交わらせ、滴り合わせ溶け合うように……主様の熱を、感じさせて欲しいのじや」

「良い、かのう……?

昨日は人肌の温かさに、ただただ乱れてしもうたが。

今日はもう、お主がしつかりとここにいてくれておるのは、分かつておるから……。

お主をより一層感じられるようにより深く、淫らに、溺れるようにな……肌を重ねさせて貰いたいんじや」

「んつ……ちゅう、んんうつ

ふう、んつ、ちゅう……く、や……うんつ

はう……んつ

ワシ、お主がしてくれる口吸い……やはり、好きじやな」

それだけで、心の奥がきゅつと締め付けられて、一緒に暖かくなつてくるのじや……ふふ」

「くおん……

うん、では主様……」

●「時間の許す限り、今度はお互いの存在を確かめ合いながら……深く、感じ合わせよう……のつ